

The Gate Wars (旧：銀河共和国軍、彼の地にて斯く戦えり)

ウエストモール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第一次ジオノーシスの戦いから始まり3年間続いたクローン大戦は、銀河共和国と独立星系連合との講話条約が締結されたことで幕を下ろし、両勢力は冷戦に突入した。

アウトリームでは未だに共和国軍と連合軍のにらみ合いが続き、住民が不安な日々を過ごす一方、コルサントの住民達は平和を謳歌し、完全に油断していた。そんな中、コルサントに門のような構造物が突如出現し、中から出現した謎の軍勢がその場の人々を虐殺する事件が発生した。軍勢を撃退した共和国軍は、門の向こう側に踏み込んで行く。

この度、題名を「銀河共和国軍、彼の地にて斯く戦えり」から「The Gate Wars」に変更しました。

目次

登場（するかもしれない）兵器や装備	1
登場人物	3
接触編	
第1話 接触	6
第2話 出発	13
第3話 逃避行	21
第4話 過去	31
第5話 炎龍を倒せ	38
没になった話	
旧第6話	45

登場（するかもしれない）兵器や装備

○DC-15Aブラスタライフル

銀河共和国クローン軍や志願兵部隊、セネト・コマンドーの標準装備であるブラステック・インダストリーズ社製の重ブラスタライフル。DC-15Sよりも威力と射程が優れているが、大型で重量がある。

○DC-15Sブラスタカービン

DC-15Aに並ぶ共和国軍の標準装備。A型に比べて射程と威力は劣るが、小型であるため扱いやすい。本作では主に室内戦闘や市街戦で使用される。

○DC-17ハンドブラスタ

ブラステック・インダストリーズ社製のブラスタピストル。大尉以上のトルーパーやARCトルーパーが携帯していることが多い。

○DC-17m 互換武器システム

クローンコマンドー等の特殊部隊が使用するブラスタライフル。狙撃アタッチメントを装着することでスナイパーライフルに、対装甲アタッチメントを装着することでグレネードランチャーにすることができる。

○DL-44重ブラスタピストル

主人公、ジークフリート・ヴァイスが個人的に所有しているブラスタピストル。原作ではハン・ソロが使用していた。

○Z-6回転式ブラスタ砲

メルソン・ミュニシヨンス社製の多銃身タイプのブラスタ砲で、6本の銃身が束ねられている。重装兵の武器として使用されたり、ピークルに搭載して使用されることが多い。

○RPS-6ロケット・ランチャー

サイナー・フリート・システムズ社製の単発ロケットランチャー。ドロイドガンシップを一撃で破壊したり、トライデント級アサルトリップを破損させるなど、高い威力を誇る。

○アイアンのバイブロハンドアックス

ガンマ分隊のアイアンが使用する振動刃の手斧

○ストーム兵団トルーパーのアーマー

ストーム兵団に所属する佐官以下が装備するアーマー。白塗りのショアトルーパーのアーマーと白塗りのスワンプトルーパーのヘルメットを合わせた見た目。

○A T T E

○A V 7 対ビークル砲

○T X 1 3 1 セーバー級対空タンク（オリジナル）

T X 1 3 0 セーバー級戦闘タンクの車体を流用した対空戦車。上部は360度回転可能な砲塔となっており、レーザー砲2門と4連ミサイル発射管2基を装備している。

○低空強襲トランスポート

○装甲ランドスピダー（オリジナル）

共和国軍が保有するランドスピダーであり、装甲を有している。見た目はガンダムに登場するホバートラックであるが固定武装は搭載せず、Z 6 回転式ブラスタ砲を設置できるようになっている。

○汎用ランドスピダー（オリジナル）

共和国軍の保有するもう1つのランドスピダーで、自衛隊の73式小型トラックのイメージ。後方の4席はむき出しになっており、幌で覆う形となっている。乗員は6名。

○B A R C スピーター※サイドカー付き

○共和国軍兵員輸送機（オリジナル）

帝国軍兵員輸送機の共和国版。別名、装甲兵員輸送機。前面にはA T T E と同じ種類の対人レーザー砲が2門、後部の上面には2連装レーザー砲が1基装備されている。

○リパブリック級スターストロイヤー

ヴェネター級の装甲及び火力強化型

○ヴィクトリー級スターストロイヤー

○ヴェネター級スターストロイヤー

登場人物

未登場の人物も載ってます

銀河共和国

ストーム兵団

○メイデイン將軍（35）

名前の由来は反乱同盟軍のメイデイン將軍。

ストーム兵団の総司令であり、特地では派遣部隊全体の指揮を執る。

○ウイアーズ大佐（29）

ストーム兵団隷下第1機甲師団の指揮官。「帝国の逆襲」に登場するウイアーズ將軍と同一人物。

○ジークフリート・ヴァイス大尉（25）

本作の主人公。ストーム兵団の第1機甲師団所属で、〈不死身のジーク〉の異名を持つ大尉。個人的に購入したDL-44重ブラスターピストルを愛用しており、高い射撃能力を持っている。本当は特殊部隊に所属しているという噂があるらしい。

髪の色は赤。

○シノ・シユワルツ軍曹

第1機甲師団所属の衛生兵。美人な上に高身長で巨乳、艶のある綺麗な黒髪を持っており、容姿に恵まれている。

○ジン・サトー軍曹

第1機甲師団所属で高いスピーダーの運転技術を持つ軍曹。また、近人間種にしか恋愛感情を持ってない。第3偵察隊に所属し、その運転技術で貢献する。

○アンテイリーズ曹長

元傭兵のベテラン兵士。偵察隊ではジークの補佐をしている。

○ルイス軍曹

重火器の扱いが得意な重装トルーパー。

○オールド伍長

元凄腕料理人の伍長。自分の店を持ったための資金を集めるため、高

い給料の軍隊に入った。

○クリスチアン大佐

主人公の回想に登場した過激派の軍人。部隊が大損害を受ける原因になった

憲兵隊

○

第501大隊

○レックス（クローンコマンダー）

○ファイブス（クローンキャプテン）

第212突撃大隊

ガンマ分隊

○リーパー（クローンキャプテン）

ガンマ分隊の隊長

灰色のアーマーを着用し、黒いポールドロンとカーマ、ヘルメットには赤いバイザーを付けている。2丁のDC-17を愛用する。

○アイアン

○ロックオン

緑色のアーマーを纏った狙撃手

元ネタは某ガンダム00のあの人

共和国宇宙軍

○フォックス・シュトルム提督

宇宙軍派遣部隊の指揮官

○オッドボール

スターファイター中隊、スクワッド・セヴンを率いるクローンパイロット。

ジエダイオーダー

○アナキン・スカイウォーカー

英雄と呼ばれているジエダイマスター

○リサ・フェレル

ガンマ分隊を率いる女ジエダイ

ジエダイオーダーからは厄介者と呼ばれる。

共和国元老院

○シーヴ・パルパティーン

共和国元老院の最高議長。決してシスではない善良なナブー出身の政治家。

シスではない↑これ大事

○オーガナ議員

○パドメ・アミダラ

○

共和国特殊兵器部門

○オーソン・クレニツク

その他

○C―3PO

○R2―D2

独立星系連合

○ドゥークー伯爵（ダース・テイラナス）

独立星系連合の国家首席であるシス

接触編

第1話 接触

1

クローン大戦が勃発してから3年後、クローン大戦は共和国のパルパティーン最高議長によって独立星系連合との間で講和条約が結ばれたことで終結を迎えたが、冷戦に突入することとなったのだ。

冷戦の状況下、アウターリムでは緊張状態が続き、共和国軍も住民も気が休まることが無かった。一方、今まで戦火の及ぶことの無かった首都惑星コルサントにおいては、完全に人々は油断していた。そして、そのコルサントで事件は起きたのだ。

大戦終結から半年程経ったころ、コルサントの中心部に謎の門のような構造物が突如出現、中から現れたのは鎧を着こんで剣や槍、弓で武装している兵士や空飛ぶ生物に騎乗した騎兵であり、彼らはその場にいた市民達を殺戮すると、コルサントに侵攻を開始した。数時間後、シヨックトルーパー隊や駆けて来たその他の部隊、ジェダイやセネトコマンドーによって侵略者は撃退されたが、コルサントには大きな爪痕が残された。後に、この事件はコルサント事件と呼ばれることとなる。

コルサント事件について、共和国元老院最高議長であるシーヴ・パルパティーンは翌日に声明を発表した。

「今回の事件において、門より現れた謎の侵略者によって多くの市民が虐殺された。彼らに全く罪は無いというのに・・・この虐殺に対して私はとても強い怒りを抱いている。今すぐにでも共和国軍を派遣し、奴らを殲滅したいところではあるが、それでは奴らと同類になってしまうだろう

そこで、まずは門の防御を固めた上、向こう側・・・つまり異世界の調査を行う。無論、門へ近付こうとする侵略者には容赦なく攻撃を加えるつもりだ。最終的には侵略者の親玉を無理矢理にでも交渉のテーブルに着かせ、国境の線引きや賠償についての交渉を行う。そし

て、賠償の大半は遺族や被害者への賠償金に充てることとする。

また、侵略者を撃退する際に、クローン軍やセネトコマンドーだけではなく志願兵の部隊であるストーム兵団が大いに活躍してくれた。特に、非番であったストーム兵団のジークフリート・ヴァイス少尉が勇敢な市民達とともに、市民が避難する時間を稼いだ結果、被害を押しさえることに貢献した。そこで、ヴァイス少尉や勇敢な市民達、さらにストーム兵団の兵士達に勲章を授与することを決定した」

なお、独立星系連合国家主席を務めるシスのダース・ティラナスドゥークー伯爵は、コルサントに出現した門の管理や調査に関して、共和国のみで門を独占することに断固反対するとし、場合によっては武力に訴える可能性もあることを表明した。

2

クリストフシス星系近郊

結晶構造が多く見られる惑星クリストフシスの所属する星系の近郊では、クローン大戦が終わっても未だに共和国軍と独立星系連合軍の艦隊が睨み合いを続けていた。当初は送り込まれる軍艦も軽クルーザー程度であったが、やがて双方の主力艦も送り込まれるようになり、現在では共和国軍は最新鋭艦のリパブリック級スターデストロイヤー、独立星系連合は量産型サブジュゲーター級重クルーザーイオンパルス砲を廃したタイプを送り込むようになっていた。

クリストフシス近郊に配置された1隻の巨艦、それはリパブリック級スターデストロイヤー2番艦リバティ。リパブリック級はヴェネター級の装甲及び火力強化型であり、ヴェネター級にあった上面のハンガードアを廃止した代わりに砲台の配置を増やしている。現在、2番艦リバティは両勢力の境界付近に接近している量産型サブジュゲーター級重クルーザーを制止するために進んでいた。

「こちらリバティ。貴艦は境界に接近しつつある、直ちに回頭せよ！
繰り返す・・・」

小さい玉のようにしか見えない程遠くにいる相手に向かい、通信士は呼び掛けを続ける。

「艦長！相手から返答ありません！」

通信士は、悲鳴のような声で艦長に報告する。それもそのはず、連合のドゥークー伯爵は共和国に武力行使する可能性を表明しており、相手艦が攻撃する意思を持っているかもしれないからだ。

「艦長、攻撃すべきでは？こちらから攻撃しなければ、確実にやられま
す」

そう進言するのは砲雷長。

「慌てるな、砲雷長。先制攻撃してしまったら、それこそ相手の思う壺だ。連合がこちら側に攻め込む口実となるだろう。衝突寸前まで相手に接近し、我々の意思の強さを見せつける」

艦長は一切慌てない。

「ラジャー」

やがて、双方は境界線を挟んで向かい合う形となり、正面衝突するのも時間の問題となっていた。

「艦長、このままでは衝突します！」

「分かっている！衝突寸前で舵を切る！武装を向けることも忘れるな
！」

双方の先端が200mの距離まで接近した時、相手の量産型サブジュゲーター級が左に舵を切った。それに合わせ、リバティも舵を切る。

「右に回頭せよ！」

2隻は並走する形となり、双方が互いの武装を向け合う。誰かが1発でも撃ったその瞬間、全力の撃ち合いが発生して地獄となるだろう。それだけではない、共和国と連合の全面戦争が発生してしまうのだ。

「撃つなよ……絶対に撃つなよ……もし撃てば、その時は地獄だぜ……」
砲雷長はコムリンクでクローンガンナーに対し、絶対に撃たないように呼び掛ける。艦内を、そしてその宙域を沈黙と緊張感が支配した。

その後、この並走は1時間近く続き、進む先に小惑星が多く存在していた量産型サブジュゲーター級は境界線から離れていった。この事件から数カ月間は連合の艦が接近することは無かったらしい。

3

俺の名はジークフリート・ヴァイス。共和国軍志願兵部隊、ストーム兵団の第1機甲師団所属の大尉だ。キャプテン今となつてはヘコルサントの英雄などと呼ばれているが、つい2年半前まではただの一般人に過ぎなかつた。

クローン大戦の序盤、宇宙軍提督だった父が戦死したという報せが入つた。惑星ナブールで一人暮らしていた母は、そんなことを信じるこゝとが出来ず、まるで父が生きているかのように生活していた。例えば、俺が実家に様子を見に行った時なんかは、俺の分も含めて3人分の食事を作り、存在しないはずの父親と会話していたのだ。俺はその光景に我慢出来ず、父はもう存在しない真実を伝えてしまった。このことを、今でも俺は後悔している。何故ならば、それを聞いた母は精神が崩壊し、焼身自殺してしまつたからだ。

その時から、俺は自暴自棄になり、死に場所を求めて様々な惑星を放浪した。そんな中、共和国軍は志願兵部隊の募集を開始、死に場所を求めていた俺は真つ先に志願したのだ。

訓練の終了後、俺達志願兵はストーム兵団として編成されて様々な惑星に送り込まれ、連合軍のブリキ野郎バトロイドや民兵と死闘を繰り広げた。その際、何故か敵の攻撃に全く被弾しなかつたことや、その逆で致命傷を負つても死なないこともあつた。その事から、俺はヘ不死身のジークと呼ばれるようになった。そして、クローン大戦集結から半年経つた頃にコルサント事件が発生、たまたまコルサントに来ていた俺はヘコルサントの英雄と呼ばれ、階級が少尉から大尉に上がるこゝととなつた。そして、異世界に派遣されるに至る。

4

帝国元老院

銀河共和国へ侵攻した謎の軍勢を門によつてコルサントへ送り込んだのは、異世界において〈帝国〉と呼ばれる国家である。帝国は異世界の大陸の1つであるファルマート大陸を支配しており、多くの属国を抱えている。そして、その帝国にも銀河共和国と同様に元老院は存在した。

「大失態に終わりましたな、皇帝陛下。全軍の過半数を失うという予想外の事態が諸国に露見するようなことがあれば、属国等の周辺諸国はたちまち反旗を翻して帝都に進軍してくるでしょう。陛下、如何にして対策を講じるおつもりか？」

元老院議員である貴族のカーゼル侯爵は、皇帝モルト・ソル・アウグスタスを追及する。通常、皇族に対してそのような振る舞いをすることは厳罰に値することであるが、この議会の中に限り元老院議員がそれをするのが許されるのだ。

「なるほど。侯爵、そなたは反乱を起こした属国の軍勢が帝都を包囲することを恐れて眠れないのだな？」

皇帝モルトのカーゼルをからかうような発言によって議会の中には彼を嘲笑する流れが生まれ、カーゼルは言葉を失う。そして、皇帝はさらに話し始めた。

「確かに由々しき事態ではあるが、帝国にとってこのような事態は初めてではない。250年前のアクテクの戦いでは、全軍が崩壊している。それに比べて今回はまだマシな状況である」

皇帝は、過去の例を上げる。

「しかし陛下、昔と異なり今は反旗を翻しかねない属国があります。それに、アルヌスの敵が帝都に侵攻してくる可能性もありますぞ」

「そのことについてだが、策はすでに用意されている」

「陛下、それはいったい？」

「聖地アルヌスを汚す異世界の賊徒がファルマート大陸全土を狙っているとして、連合諸王国軍を召集する。そして、アルヌスの丘に攻め入るのだ」

「連合諸王国軍？」

議会内にざわめきが広がる。連合諸王国軍とは、約200年前に東方の騎馬民族の帝国の侵攻に対抗するために諸王国が結成した連合軍であり、有名なそれを知らない者はいないという。

「諸王国軍が異世界の敵と対峙している間、アルヌスから帝都に至るまでの村や町を焼き払い、食料は全て運び出し、畑には塩を撒いて井戸には毒を投げ入れる。そうすれば、強大な異世界の軍であろうと

も、帝都に至る頃には補給が持たずに弱体化するであろう」

皇帝モルトは、広大な国土を利用して焦土作戦を行うつもりなのだ。なお、焦土作戦の市民の生活を一切考慮しない性質上、民心が離れていくのは確定である。

「しかし陛下、異世界の敵には帝国軍でさえ勝てませんでした。もしかしたら、連合諸王国軍は壊滅するでしょう」

「仮に連合諸王国軍が壊滅するのであれば悲しいものだな。いずれにせよ、彼らは大陸を守るために戦った英雄達として記録され、我ら帝国は今まで通りに諸王国を指導して侵略者に立ち向かうだろう」

皇帝は、諸王国の軍勢を異世界の敵にぶつけて壊滅させることで、相対的に帝国の優位性を維持しようとしている。カーゼル侯爵はそんな皇帝の真意に気づいた。

「これが今回の事態に対する対策である。以上だ、今日はこれで解散とする」

皇帝モルトによって帝国の方針は決まった。

5

アルヌスの丘

あの忌まわしい惨劇から半年後、異世界門突入作戦を行った銀河共和国軍派遣部隊は、門の周辺を確保。アルヌス奪還のため送り込まれてきた帝国の軍勢を全て返り討ちにしていった。

第1陣として派遣されたのは、コルサント事件で活躍したストーム兵団の第1機甲師団、さらに精鋭クローン部隊の第501大隊である。第1機甲師団はヴィアーズ大佐が指揮を執り、第501大隊はジェダイ将軍が任務で不在のためにコマンドーレックスが指揮を執る。そして、派遣軍の各部隊を纏める最高司令官は、ストーム兵団司令のメイデイン将軍が務めることとなっていた。なお、4週間後には調整を終えた後続部隊が到着する予定である。

1週間後、新たな軍勢がアルヌスに接近していることが偵察により判明し、守りが固められていた。共和国側は知らないが、その軍勢は帝国によって召集された連合諸王国軍である。丘の中腹の塹壕には501大隊隷下トレント中隊のクローントルーパーが展開し、後方に

は対異世界軍用に開発された対人用砲弾を装備したA V—7対ビークル砲が配置されていた。

「こちら、コマンドーレックス。キャプテンファイブス、応答せよ」

レックスは、塹壕のトレント中隊を指揮するA R Cトルーパーのキャプテンファイブスにコムリンクで連絡を取る。

「こちらキャプテンファイブス」

「ファイブス、もうそろそろで敵部隊がここから1 k mのキルゾーンに到達する。照明弾で合図を出すから、そのタイミングで射撃を指示してくれ。その後、砲兵隊で総崩れとなった敵を完全に粉砕する」

「ラジャー」

通信を終了した後、レックスは望遠装置であるエレクトロバイノキュラーを覗く。すると、敵の部隊の中心がキルゾーンに入っていた。それを確認したレックスは、発射器を斜め上に向けて紫色に光る照明弾を打ち上げた。

「今だ、野郎共撃て！」

照明弾を見たファイブスの号令でトレント中隊のクローン達はD C—15ブラスタライフルを撃ちまくる。一斉に飛んでいった青いプラズマの銃弾は、前面に展開している重騎兵をなぎ倒し、その後ろの怪異や重装歩兵にも少なからず被害を与えた。この攻撃で混乱が起こり、敵の隊列が崩れる。

「砲兵隊、砲撃開始！」

砲兵隊にレックスがエレクトロバイノキュラーで攻撃目標を指示し、砲兵はそれに従って対人弾を発射。敵部隊の頭上で爆発した砲弾は、大量の子弾を撒き散らし、怪異や人間、軍馬をまとめてズタズタに引き裂く。そこには、身分も種族も関係なく体を引き裂かれる地獄があった。

その後、連合諸王国軍は2回目の攻撃も失敗し、しまいには夜襲も仕掛けてきていたのだが、暗視装置をヘルメットに装着したクローントルーパーの敵では無く、一瞬で壊滅したらしい。

第2話 出発

1

翌日の朝、朝日に照らされているアルヌスの丘は、人馬や怪異の骸、レーザー砲で撃ち落とされた飛竜で埋め尽くされており、共和国軍はその後片付けに追われていた。

「これは酷いな・・・」

ジークは呟く。その目線の先には、今まで生き物だった筈の肉塊が多く転がっていた。これは、対人弾によって体を引き裂かれた者共の成れの果てだ。さらに、レーザー砲やプラスター等のプラズマ兵器によって撃たれた死体はその熱によって焼けただれており、肉片は腐乱臭を放ち、武器を構成する鉄の臭いと混じって周囲を不快な空気にする。

「ウツ・・・何てヒドイ臭いと光景だ。ヴァイス大尉、しばらくは肉も食べませんよ」

スピーダーの操縦席からそう言うのはジン・サトー軍曹。彼はジークの部下であり、スピーダーやウォーカーの操縦を行うコンバットドライバーである。ヘルメットを被っていて表情は見えないが、不快そうな顔をしているのは間違いない。

「そうだな。しばらく俺はイウオークジャーキーを断つことになりそうだ」

イウオークジャーキーは、その名の通りイウオークの肉を材料にしたスナックである。

「サトー、これは早く片付けないとまずい。片付けが1日遅れると1日肉が食えなくなるぞ。そう言えば、司令室からは遺体と鎧を別々にするように命令が来ている」

「わざわざ分ける必要なんてあるんですか?」

「どうやら、鎧や剣を鉄屑として売り払って遺族への賠償金の一部に充てるつもりらしい」

「なるほど」

「とにかく遺体を運ぶぞ」

「ラジャー」

他のトルーパー達によって後部座席に遺体が積まれていき、一杯になったスピーダーは助手席にジークを乗せ、サトーの操縦で基地へと向かった。

「將軍、戦死者数の集計が完了しました」

ジークの上官、ヴィアーズ大佐は派遣部隊司令官のメイデイン將軍に報告する。

「ご苦労だった。それで結果は？」

「はっ、形を留めていないものやクリーチャーを除いて、合計6万人の遺体を確認しました。これ以前と合わせて12万人です」

「文明レベルから察するに、敵はおそらく惑星を統一していない小規模な国家だろう。そのような国家が12万人も兵士を失うということとは大きな痛手、しばらくは攻撃も沈静化するだろうな」

「そろそろ偵察にも力を入れたいところですよ」

「勿論だ。3週間後にアルヌス要塞が完成し、第2陣の212突撃大隊や宇宙軍派遣部隊が到着すると思われる。そのタイミングで6個の偵察隊を派遣し、現地の民間人と接触させる。人員に関してだが、大半はストーム兵団から出すことになっている。コマンダー、人選は君に任せる」

「了解しました、將軍」

2

3週間後

アルヌス要塞は完成した。門を囲むように建築されたデュラスチール製の防壁は五角形の星形となっており、その回りには堀や塹壕が張り巡らされている。

内側には門だけではなく、司令室や兵舎を含めた駐屯地、ファイターやガンシップ、地上ビークルの格納庫、さらには小型のスターシップやシャトルが着陸可能な着陸パッドが設置されていた。

防衛用の装備も整備されており、AV-7対ビークル砲や対空用のレーザー砲、ブラスタ砲、ターボレーザー砲、シールド発生装置が

設置され、陸や空だけでなく宇宙からの脅威にも対抗出来るようになってる。

「ヴァイス大尉、君には第3偵察隊を率いてもらう」

「ヴァーズ大佐はジークに命じる。」

「ラジャー」

「大半のメンバーは我々第1機甲師団、それも君の元部下達から出すことになっているが、ジェダイが率いるクローン分隊も同行することになった」

「どうしてジェダイが？」

「ジェダイオーダー曰く、現地人との交渉の人材として派遣するらしい。が、おそらく実態はお目付け役だろう」

「ところで、第3偵察隊にはどのようなジェダイが？」

「それについてだが、ジェダイオーダーで厄介者と呼ばれている女ジェダイが来ることになった」

「その噂、聞いたことがあります。たしか、ジェダイなのにコルサントのホストクラブに行ったりしていたとか」

「彼女がオーダーを追放されなかったのが不思議だよ」

その後、ジークは大佐に指定された格納庫の前へと向かい、元部下達と再会。さらに、同行する例のジェダイと顔合わせした。

「あんたが不死身のジークかい？思ったよりも強くは見えないねえ」

例の女ジェダイの第一声がこれである。

「ヴァイス大尉です。あなたは？」

「あたしはリサ・フェレル、かの有名な厄介者のジェダイさ。そして、後ろにいる野郎共はあたしが率いているガンマ分隊だ」

フェレルと名乗ったその女ジェダイは、長い黒髪を後ろで1つに縛っており、顔には十字の傷があった。さらに服装はよく見るジェダイの服ではなく、有名なアソーカ・タノのような袖が無い服になっていた。腰には2本のライトセーバーを下げている。

「ガンマ分隊の野郎共のことを紹介してやる。あんた達！大尉に自己

紹介しな！」

3人のクローンが歩み出てくる。

「CT-2006、キャプテンリーパー。姉御の副官だと思ってくれ」
ヴァイスと同じ大尉であるリーパーの装甲服は全身が灰色となっており、黒いポールドロンとカーマを装着している。ヘルメットには赤いバイザーとアンテナが付いていた。

「CT-2008、アイアン。大好物は近接戦闘だ」

アイアンの装甲服は名前の通りに鉄の色となっており、背部には2本の振動刃トマホークが装備されていた。そして、胸部や肩のアーマーが他のトルーパーよりもゴツくなっている、ヘルメットには赤いトサカが付いている。

「CT-2283、ロックオン。特技は狙撃、ガンマ分隊の中では新参者の部類です」

ロックオンの装甲服は深い緑色となっていて、ヘルメットには暗視装置に近い構造の装置が装着されていた。おそらく、狙撃を補助する装置だろう。

「癖は強いが、頼れる野郎共だ。使ってやってくれ」

「は、はい」

この女ジェダイ、本当にジェダイなのか？

「そういえば、フェレルさんはどうしてオーダーから厄介者と言われているんですか？」

「そのことかい。話せば長くなるし、道中で話すことにしよう」

3

ジーク達が出発するのとはほぼ同時の時間、派遣軍第2陣が到着した。

門からオレンジのペイントを施されたクロントルーパーが続々と入ってくる。彼らは第212突撃大隊、ケノービ將軍とコマンダーコーディイが指揮する部隊である。

その後が続くように入ってきたのは、リパブリッククルーザーやゴザンティ級クルーザー、ペルタ級フリゲート、分解された共和国軍軽クルーザーだ。いずれも浮揚式の荷台で運び込まれており、よく見る

と建設用や採掘用の資材も確認できる。共和国軍が異世界の宇宙で何かをしようとしているのは確実であった。

「將軍、宇宙軍派遣部隊の提督が来ています」
「通せ」

執務室のスライドドアを開けて入ってきた提督は、明らかに20代前半の金髪の男だ。

「宇宙軍派遣部隊指揮官、フォックス・シュトルム提督です」

「私は総司令のメイデイン將軍だ。提督に1つ質問があるのだが」
「どうぞ」

「単刀直入に聞こう、宇宙軍が来た目的は何だ？上に聞いても開示されなかったものでね」

「將軍に対して宇宙軍派遣部隊の目的をお話するように上から言われています」

「今になってから説明するとは、簡単に出せない内容のようすな」

「我々の目的の1つ目は、異世界の宇宙を探索し、宇宙に採掘場や工場を作ることで自給自足できるようにすること。もう1つは、宇宙に工場を作る過程で造船所を併設した宇宙港を建設し、そこで建造したスターゲストロイヤードで火力支援を行うことです」

「こんなことを独立星系連合が知ったら、ますます圧力を掛けてきそうだ」

「だから開示されなかったわけです。ところで將軍、ここでは話せないことがあります。場所を移して2人だけで話しましょう」

移動した2人は、運び込まれていたリパブリックフリゲートの中へ入る。乗艦する人員がまだ到着していないため、艦内は空だ。

「現在、我々宇宙軍は共和国特殊兵器部門と協力し、とある計画を押し進めています」

「とある計画？」

「はい。その計画は〈異世界門解析及び他世界渡航技術開発計画〉通称、フロンティア計画です」

「それはまさか・・・」

「そのまさかです。それが成功すれば、我々共和国軍は自由に世界間

の壁を通過して戦力を行き来させることができます。それどころか、様々な異世界に存在する勢力と事前に交渉することで、コルサント事件のような悲劇を減らすことができるでしょう」

「しかし、門は科学とは無縁な技術で作られていると聞いている。科学で再現できるはずがないのでは？」

「將軍、あなたはハイパードライブテクノロジーがどのようにして普及したのかご存知ですか？」

「宇宙関係の技術には疎いものでね」

メイデインは首を左右に振って言う。それに対し、シユトルムは説明を始めた。

「共和国が誕生する前、ラカタン無限帝国によって使用されていたハイパードライブは、フォースという超常的な力がなければ利用できませんでした。帝国の滅亡後にコレリアの科学者によってハイパードライブは科学で再現されました」

「なるほど、今回の門もそれと同じということか」

「はい。仕組みを理解できれば、何でも科学で再現できるのです。では將軍、私はこれから宇宙に上がりますので、失礼します」

4

アルヌスを出発した第3偵察隊は、5台のスピーダーに分乗していた。構成は装甲ランドスピーダー1台と汎用ランドスピーダー2台、サイドカー付きBARCSピーダー2台であり、BARCSピーダーの方にはジェダイとガンマ分隊が搭乗する。

「それじゃあ、あたしの過去について話すのでしょうか」

リーパーが操縦するBARCSピーダーのサイドカーに座っていたジェダイのフェレルは、コムリンクを通して話し始める。

「あたしは、気づいた時にはコルサントのアンダーワールドで孤児として暮らしてた。だから、両親の顔は知らない。そして、推定年齢10歳の頃にフォース感応者としてジェダイからスカウトされたの」

「10歳でスカウトですか・・・普通、ジェダイって幼少期にスカウトされるものだったはずじゃ？」

不思議に思ったジークは尋ねる。

「そう、普通はね。けど、アンダーワールドにはジエダイもあまり踏み込まないから発見が遅れたみたい。あのスカイウォーカーも、アウターリムのタトウインにいたから発見が遅れたらしいね」
「なるほど」

「そして、あたしはジエダイの訓練を受けて腕を認められ、無事にジエダイナイトになった。そこまでは良かったんだけど・・・」

刹那、彼女は沈黙する。

「お忍びで聖堂を抜け出して、いろいろな男と交際してしまったの。もしかすると、あたしは愛に飢えていたのかもしれない」

ジエダイの規則では、執着はダークサイドに繋がるとして恋愛は禁止されているのだ。

「で、すぐにバレた。一部のジエダイ評議員はすぐに聖堂から追放しろと訴えていたけど、大半の評議員は腕の立つあたしがダークサイド側に流れる可能性を考えて、不問にするという判断を下した」

「それで、また男と交際したんですか？」

「もちろん、その通りさ。その時のことがもとになって、厄介者と呼ばれることとなった」

「フェレルさん、その時いったい何があったんです？」

「あたしがこれ以上様々な男と交際すると、ジエダイオーダーの威厳が潰れるから、逆に評議会は私に結婚を許可して、1人としか付き合わないようにしたのさ。まあ、誰も結婚せずに数年経ったけどね」
「どこに厄介者の要素があるんです？」

ジークの乗る汎用スピーダーを操縦しているサトーが突然発言した。

「この後が問題なのさ。あたしが結婚を特別に許可された後、同世代のジエダイ達が自分達にも結婚を許可しろと訴え始めたんだけど、一斉にオーダーを離れられても困るから、評議会は渋々それを認めた。その結果どうなったと思う？」

「いえ、予想がつきませんよ」

「それを渋々認めたことにプライドを傷つけられた一部の評議員が隠居してしまった。とにかく、ここまでオーダーを狂わせた原因である

とされたあたしは、厄介者と呼ばれるようになったのさ」

「は、波瀾万丈の人生ですね・・・」

ジークは若干引いていた。

「ヴァイス大尉、そろそろ偵察機が発見した集落に到達します」

コムリンクに割り込んできた声の主は、アンティリーズ曹長。大戦のときは常にジークの隣にいた男だ。彼は元傭兵であり、経験はジークを上回る。

「分かった。驚かせないように集落から離れた場所に停車し、最初は少人数で接触する」

その後、平和的な交渉によってこの集落の名前がコダ村であること判明、偵察隊は村長から紹介された森の中に存在する村に向かうこととなる。

第3話 逃避行

1

「まさか、紹介された集落が壊滅してしまうとはな。ハア・・・」
ジークはため息をつく。彼の周囲には、焼失した家々や黒焦げになった木材が散乱していた。

「隊長、27人の焼死体を発見しました。村の規模から考えても少なすぎですが、おそらく建物の下敷きになったか、例の巨大クリーチャーに補食されたためと思われるです」

同行するジェダイを除けば唯一の女性兵士である衛生兵、シノ・シユワルツ軍曹が報告する。

「報告ありがとう、シユワルツ軍曹」

「しかし、何人かいた瀕死の者を1人も救えなかったのは、衛生兵として情けなく思います」

「落ち込んでいても何も変わらない、俺達は今できることをしよう。あちらのようにな」

ジークの視線が移動した先には、ジェダイのリサが配下のガンマ分隊と共に埋葬を始めていた。

「では、私も埋葬を手伝ってきます」

シノはガンマ分隊の方へと向かって行った。

「なあ、曹長。この村を襲撃していた巨大クリーチャーに俺達で勝てると思うか？」

ジークは唐突に後ろにいたアンティリーズ曹長に話を振る。

「どうでしょうね。どれくらいの防御力を持っているか分かりませんし」

「二応、コルサントに現れた敵の飛行型クリーチャーの鱗は、DC—15Aブラスタライフルで簡単に貫通できたらいいが・・・」

「ただ、あれ程の巨大なクリーチャーとなると、ブラスターも通用しにくいはず・・・それが空を飛んで火を吹くとなると、恐ろしいものです」

「戦うときは連射式ブラスターやロケットランチャーの攻撃とファイ

ターの支援が必要になりそうだ」

曹長と会話した後、ジークは水質検査のために村跡の井戸へと向かう。そして、ロープに繋がれた桶を中に落とした。

突然、コン！という甲高い音が響く。

「曹長・・・今の音は？」

「おかしいですね、水が跳ねる音とする筈なのに・・・大尉、確認しましょう」

2人は顔を見合わせた後、恐る恐る井戸に近づいて中を覗き込む。すると・・・

「人だ・・・生きてるかもしれない、引き上げるぞ！」

水に浮かんでいたのは、長い金髪の少女であり、耳の先は尖っていた。

彼女の正体はエルフ、コルサント側の世界には存在しない種族である。

2

アルヌス要塞

ゲートの目の前に、第501大隊のトレント中隊は整列していた。彼らの先頭には、コマンダーレックスがいる。

彼らが集まっている理由、それは501大隊を指揮するジェダイ将軍である、アナキン・スカイウォーカーが任務から帰還するからだ。

やがて、ストーム兵団の兵士が重そうな扉を開けると、中の暗闇から暗い茶色のローブを着用したジェダイ、アナキンが姿を現した。その傍には、金ピカのプロトコルドロイドと、青い頭部のR2ユニットも付いてきている。

「スカイウォーカー将軍、お疲れ様です」

外したヘルメットを脇に抱えたレックスはアナキン達に歩み寄って言う。

「レックス、元気そうでなによりだ」

「はい、ここにはブリキ野郎はいませんが、充実しています。ところで将軍、ここへ来る前にアミダラ議員にはお会いしましたか？」

「勿論だ。ここで1つ朗報があるんだが、パドメが子どもを身籠った。

「それも双子だ！」

後に兄の方はジェダイとして、妹の方は艦長として活躍していくことになるのだが、それはまた別のお話である。

「おめでとうございませう、將軍！お子さんが生まれたら、大隊の皆で見に行きたいものです」

「さすがに皆で行ったら、同じ顔ばかりで子ども達が混乱しそうですね」

少し間をおいてアナキンとレックスは大笑いし、その笑いは整列していた他のトルーパー達にも伝播した。

「俺はR2と一緒に今からある物を受け取りに行く。レックス、C-3POのことを頼む」

「ラジャー」

アナキンとR2が離れ、トルーパー達が解散した後、その場にはレックスとC-3POが残された。

「キャプテンレックス、お久しぶりです」

「今はコマンダーレックスだ、金ピカドロイド君。回路にジオノーシスの砂でも入ったか？」

「ジオノーシスには悪い記憶しかありません。それに、あたくしにはC-3POという立派な名前が……」

「それで、金ピカ君は異世界の言語を覚えたのかい？」

「勿論ですとも！あたくし、600万以上の言語に精通しておりますので、その程度楽勝です」

「そうか……頼もしいな。C-3PO、これから忙しくなるかもな」

レックスはそう言ってC-3POの肩を軽く叩くと、その場を立ち去っていった。

3

「シユワルツ軍曹、彼女の容態は？」

「安定はしていますが、何せエルフとかいう未知の種族です。容態の良し悪しは正確に判断できません」

「たしかにな」

「ただ、衛生兵として様々な種族を診てきた経験から言えば、バイタルは安定しているので命に別状はないと考えられます」

「問題は、彼女の身柄をどうするかだ」

ジークは顎に手を当てる。

「流石にここに置いていくのは不味いです」

「だったら、我々で保護しよう。この後3件程村を回る予定だったが、彼女を連れ回して負荷をかける訳にはいかない。それに、今はあのクリチャーのこともある、真つ直ぐコダ村に戻るとしようか」

「それが1番でしようね」

やがて、調査を終了した第3偵察隊の姿はコダ村にあり、村人達は再び訪れた白いアーマーの兵士達を出迎えた。ジークは、村長に森の集落が壊滅したこと、それが巨大な火を吐くクリチャーによるものであることを片言の異世界言語で説明する。

「間違いない、それは炎龍じゃ！壊滅してしまったとは、まことに残念なこと……」

村長の顔は青ざめていた。

「炎……龍……？」

炎龍、それは知らない名称だった。ジークは、メモにその名前を記録する。

「炎龍の名をを知らないのか？炎龍は危険な怪物じゃ、討伐された例が1度も無い程にな。それはともかく、あなた方が無事で良かった。この報せが無ければ、この村は全滅していただろう」

「それと、エルフの少女……助けた……この村で……保護……」

保護を求めようとするものの、村長は首を横に振る。

「残念だがそれは難しい、人とエルフでは文化が違いすぎる。それに、今から我々は村を捨てる」

「え？」

「エルフや人の味を覚えた炎龍は周辺の村や町を襲う。だから、村を捨てて移動する」

村長はそう説明すると、村人達を集めて事態を説明し、その30分後には村の前に馬車の列ができていた。

コダ村の中心から離れた場所にある1軒の家、そこには魔導士であるカトー老師とその弟子であるレイ・ラ・レレーナが暮らしている。炎龍の出現の報を受けた彼らは、他の村人達と同様に馬車に荷物を積み込んでいた。

「これ以上乗らない・・・」

貫頭衣を纏ったプラチナブロンドの少女、レイの目の前に鎮座するのは、荷物が山のように載せられた1台の馬車。

「レイ、何とかならんのか？」

窓から頭を出したカトー老師は言う。

「師匠、それは無理。無理矢理荷物を載せてしまったら、馬で引けなくなる。諦めることも肝心」

「仕方ない、載せるのは本などを優先して、植物の種などは地下室にでも放り込んでおくしかなさそうじゃ」

老師は、レイから種などが入っているいくつかの袋を受けとると、家の中に戻ってベッド下の隠し扉を開けた。

「もしも生きていたら、取りに帰るとしよう」

植物の種達に別れを告げた老師は、弟子の待つ馬車へと戻り、馬に鞭打った。が・・・

「動かんぞ・・・」

馬車は動かない。一部の荷物を下ろしてもなお、重量はオーバーしていたようだ。

「わ、ワシらは魔導士じゃ、普通の人間のように荷物を運ぶ必要はない。魔法があるのだから」

老師は額から汗を流しながらそう言うと、魔法を使って重さを軽減する。すると、やっと馬車は動き出した。

4

やがて、2人の乗る馬車は村の中心部に到達するのだが、馬車の渋滞に巻き込まれて停止する。

「どうなっているのかね？」

なかなか馬車の列が進まないことに苛立ったカトー老師は、近くにいた村人を捕まえて話を聞いた。

「すみません、カトー老師。この先で車輪の折れた馬車が道を塞いでいるんです、どうやら荷物を積みすぎたようで……」

ジーク達による速やかな通報によって避難に余裕のある村人達は、出来るだけ多くの物を持ち出したいと考えており、それが裏目に出たのだ。

村人とカトーが話している間、レレイの興味は後ろからやってきた白いアーマーのヒト種に対して向けられていた。彼らはいずれも謎の言語を話しており、話し声から男だけではなく女が1人いるようだ。

「この先で動物に引かせるタイプの乗り物が事故を起こし、道が塞がれている状況だ。ルイスは後続に事故を伝え、シユワルツは現場で怪我人の応急処置を頼む」

兜と鎧を纏っており、当初は帝国の騎士団かと考えたが、剣とは異なる黒い杖を持つていること、言語が分からないことから、帝国の騎士団ではない。少なくとも、指揮系統があることから戦うための集団であることだけは分かった。

やがて、1人の女性兵士が事故を起こした馬車の方へ走って行く。

「師匠、ちよつと様子を見てくる」

師匠にそう伝えると、馬車を降りる。しばらく進むと事故を起こした馬車があり、地面に倒れる男性と母子、泡を吹きながらもがいている馬の姿があった。そして、村人達は馬のせいで近づけないでいる。

「君……危ない……下がって」

近くにいた女性兵士が片言で危険だから近づくなとレレイに伝えてくるが、レレイは母子が怪我をしていることに気付くと、制止を振り切って駆け寄る。馬が近くでもがいていて危ないが、人命が大事だ。

「これはまずい……」

母親と父親は普通に気絶しているだけだが、子供は血の気が失せて

ぐったりし、多くの汗が出ている上に身体が冷えていこうとしている。

「レレイ！何があった?!」

声に振り替えると、事故の報せを受けたのか村長と白い鎧の人が一緒に駆けつけてきていた。

「村長、子供の容体が危険。たぶん馬は助からないと思う」

「カトー老師はどこに?」

「師匠は後ろの馬車にいる。私は様子を見に来ただけ」

ふと傍らを見ると、先程の女性兵士が子供の容体を診ており、手際が良いことから医学を学んだ者であると分かる。

「危ないー!」

突然の叫び声。同時に聞こえてきた謎の高音に驚いて振り返ると、頭部から煙を出して倒れる馬の姿がすぐ近くにあった。突如として暴れだした馬が自分の方へ向かってきていたのだ。

一方、村長がいる方向には黒く小さい杖を馬に向けている白い鎧の人がいた。被っている兜から少し見えている赤髪が特徴的だ。レレイに推測できたのは、彼が自分を守るためにその杖を使って何かしたということだけであった。

ふう、危なかった・・・

ジークは胸を撫で下ろす。

少しでも判断が遅れていれば、あの少女はぐったりして倒れている子供の仲間入りどころか、それ以上の重体になっていただろう。

あの時、ジークは愛用しているDL-44重ブラスター・ピストルを咄嗟に引き抜き、確実に殺すために動物の頭部を狙った。DL-44の威力はアーマーを一撃で貫通する程であり、動物を絶命させるのには十分な威力だ。

たまたま威力の高いDL-44を愛用しており、たまたま反応して引き抜くことが出来た。そして、命中率が低そうな頭部を撃ち抜くことに成功した。まさに奇跡であったのだ。

5

「ヴァイス大尉、少しいいだろうか？」

あの事故から少し経ち、村人達の避難の手伝いを指揮していたジークの所に、ガンマ分隊のキャプテンリーパーがやって来た。

「リーパー大尉、どんなご用件で？」

「単刀直入に言おう、これより我々ガンマ分隊は一時的に単独行動を取る」

「何故です？」

ジークは首を傾げる。

「盗賊対策だ。こんなに大人数が移動すれば、必ず目をつけられる。だから、我々が避難民の進行ルートを先行し、脅威を排除することにした」

「それは助かりますけど、大丈夫ですか？」

リサを含め、たった4人で未知の世界へ赴くのだから、心配するのは当然である。

「まあ、こつちには姉御がいる。心配の必要はないさ」

リーパーは戻っていき、分隊の仲間と共にスピーダーバイクに飛び乗って何処かへと走り去った。

その夜

「お頭、コダ村だそうですね」

数十名の盗賊達は火を囲んで小規模な宴会を開き、享楽を味わっていた。皆、ドラゴンから逃げるために単独で行動していた馬車を襲って得た食料を食らうのだが、特に盗賊団を率いる役目にある者達は同時に生け捕りにしていた母娘で早めに欲を満たし、いい気分で酒を飲んでいた。

入ってきた情報は、コダ村の住人達が炎龍から逃げるためにキャラバンを組んで出発したという情報だ。

「恐らく村の連中は足が遅い。襲わない訳にはいかないな。だが、人手が足りんぞ？」

「そこはお頭が、周りの盗賊に声を掛ければ大仕事が出来ただけの人員が集まりますぜ」

お頭と呼ばれる盗賊は妄想した。キャラバンを襲った後、戦利品を配ってさらに人員を集め、それらを率いて何処かの町を襲い、領主を追い出して自らが支配者になっている光景を。しかし、それも妄想だけで終わる。

「残念だけど、それは無理な話だよ」

突然聞こえてくる若い女の声。聞こえてきた方向を見ると、袖の無い服を着た人間が立っていた。やがて、焚き火や松明でその顔が浮かび上がる。

「誰だ？」

その女は明らかに美人だった。身長も高く腰も括れており、スタイルが良い。

「よかつたら遊んでいかないかい？」

その言葉を聞いたとき、盗賊達はその女が村から差し出された生け贄だと思っていた。

「お前ら、あの女をこっちに連れてこい」

お頭から命じられた盗賊2人が、女の方へと向かっていく。だが……

「何を勘違いしてんだい？あんた達と遊ぶのはアタシじゃないよ？アイアン！暴れな！」

女が叫んだ瞬間、近くの草むらから銀のアーマーに身を包んだ大男が飛び出して来て、手にした2本のトマホークで自分の周りを固めていた配下達を切り刻み、遂には俺の首を切断した。俺が最期に見た光景は、切断面から血を噴き出す自身の胴体、そして蜘蛛の子を散らすように逃げ出していく配下達であった。

「姉御に近づくな！」

「狙い撃つぜ！」

キャプテンリーパーは、リサに近づいて来ていた盗賊2名の頭部を2丁のDC-17ハンドブラスターで撃ち抜いた。一方、樹上ではロックオンが狙撃用にカスタマイズしたDC-15を構えており、逃げ出した盗賊達を次々と屠っていた。

数分後、集まっていた盗賊は壊滅した。なお、声を掛けようとしていた盗賊団は既に殲滅されており、この盗賊団も遅かれ早かれ殲滅される運命であったのだ。

「姉御、後片付けはどうします?」

現れたのは返り血をたつぷり浴びたアイアンだ。その姿は、まるで鎧を着た悪魔のようだ。

「一応、全部埋葬しよう。ただ、盗賊による犠牲者の遺体は盗賊の遺体から離れた所に埋葬だ。それとアイアン、あんたは自分を綺麗にしな」

「分かったぜ姉御」

そして、各々が動き出す。しかし、その姿を遠くから見ている者がいた。

「クスクスクス、あの人達面白そうねえ」

黒服の少女は自身の体と不釣り合いな大きさのハルバードを肩に担ぐと、リサ達の方へと歩き始めた。

第4話 過去

「後片付けは完了です」

死体の後片付けを終えたリーパーはリサに報告する。それと同時に、ロックオンとアイアンも集合した。

「野郎共、これからジークの所に戻るよ」

「「ラジャー！」」

そして、スピーダーバイクの所に戻ろうとするが……

「?!……全員伏せろ！」

何かに気付いたのか、リサは分隊の全員に伏せるように命令し、全員が即座に伏せた。同時に彼女は後ろを向き、掌を開いた右手をまっすぐ突き出した。

次の瞬間、風を切るような音とともに飛来した高速回転する斧槍が彼女の右手の前で静止する。

「何だこの斧は?!俺のハンドアックスよりもデカイじゃないか！」

アイアンは言う。

「これだけ大きな斧を投擲するくらいだ、こいつの持ち主はアイアン以上の大男の可能性が」

ロックオンは冷静に分析した。

「いや、持ち主はあんた達が思っているような奴じゃないみたいだね」

3人のクローンはリサの目線の先を見る。そこには、黒い服装に身を包んだ黒髪の少女がおり、その白い肌は美白と言えるようなもの。そして、その華奢な身体からは重いハルバードを持っている姿を想像することはできない。

「いきなり斧を投げるなんて、穏やかじゃないねえ。いったい、お嬢さんは何者なんだい？」

「わたしはロウリイ・マーキュリー、暗黒の神エムロイの使徒」

エムロイ、それは初めて聞く言葉だった。

「エムロイだか何だか知らないが、何故俺達に近付いた？」

リーパーは目の前の神官を名乗る少女、ロウリイ・マーキュリーに

問う。

「お礼を申し上げるためよお。わたしの代わりに盗賊に手を下して、彼らの魂を主神に捧げてくださったのですから」

斧を投げつけてきた上、「神」だとか「魂を捧げる」だとか言っている少女に対するガンマ分隊の面々の評価は、「危なそうな奴」で統一されていた。

「それじゃあ、斧を投げつけてきたのは何故なんだい？ 場合によっては、いきなり敵対するなんてこともありえるからねえ」

今度は、リサが問う。

「あなた達に興味が沸いたからよお。試すために投げつけてみたけど、対応できたから合格よお」

「一体、何の合格だい？」

「私があなた達に付いていくに値するかどうかよお。もしも不合格なら、あなた達の魂を貰うところだったけど」

「そうかい。まあ、あかし達に付いてくるのなら勝手にしな。別に、拒みなんかしないよ」

リサの発言に、リーパー達はヘルメットの下で驚愕の表情を浮かべる。少女とはいえ、相手はあの重そうな斧槍を持てる程の怪力であり、場合によってはこちらの命を狙ってくる可能性もあったため、警戒するのは当然だ。

「姉御、いいの？ 彼女は危険だ」

少女に分からないよう、リーパーは異世界の言語ではなく銀河ベシック標準語でリサに言う。

「スリルがあつた方がいいでしょ？ それに、あかし達は今まで多くの危険をくぐり抜けてきたし、このくらいじゃビビってられないよ」

「ラ・・・ラジャー」

このような出来事で少し遅れることになったが、ガンマ分隊はようやく出発することができた。

2

コダ村の避難民を乗せている大量の馬車と、先頭を進む第3偵察隊のスピーカー3台は荒野を進む。彼らは、行く当てのない逃避行を続

けていた。

「大尉、前方より何か接近しています」

軽装甲ランドスピーダーの銃座についている重装トルーパーのルイス軍曹が報告する。

「分かった、総員警戒せよ」

スピーダーは停止し、命令を聞いた兵士達はDC-15AブラスタライフルやDC-15Sブラスターカービンを準備。ジークは携帯式の望遠装置を覗いた。

やがて、接近している何かの姿が望遠装置に映る。それは、2台のスピーダーバイクであった。

「あれは・・・軍のスピーダーバイク！それもガンマ分隊だ！総員、警戒を解除」

そして、ガンマ分隊のBARCSピーダーがジーク達第3偵察隊の目前で停止する。ジークはランドスピーダーを降り、ガンマ分隊を出迎える。

「フェレルさん、1つ質問いいですか？」

「別に構わないよ」

「膝の上に座っている少女は誰ですか？まさか、どこかの村から拉致・・・？」

リサはスピーダーのサイドカーに座っているが、その膝の上に黒い服を着た少女が座っていた。

「何言ってるんだい、ジェダイの素質が無い人間を拉致なんてしないよ。そもそも、彼女が勝手に着いてきただけさ。ロウリイ、彼に自己紹介しな」

ロウリイと呼ばれた少女は、リサの膝から降りると、ジークに自己紹介する。

「私はロウリイ・マーキュリー。暗黒の神エムロイの使徒よお」

「俺はジークフリート・ヴァイス、この部隊の隊長だ」

ロウリイは、ジークを品定めするかのようじつくりと観察した後、突然人差し指を彼の頬に当てて言う。

「ふーん、あまり強そうに見えないけどお、あなたからは戦いと血の臭いを強く感じるわ。あなた、戦場で相当な数の敵を殺して破壊したようねえ」

その発言に対し、ジークは沈黙する。

「……………」

その様子を見たロウリイは、そのまま立ち去っていった。

戦いと血の臭いか……………」

やはり、簡単に洗い流せるものではないのだな……………」

やがて、ジークがスピーダーに戻ると、馬車の列は再び逃避行を始めた。

3

あれは、俺が新兵として志願兵部隊に配属された頃の話だ。その時、俺が配属された大隊は、独立星系連合側についた民兵を鎮圧するため、とある惑星に投入されていた。

野生動物の気配のない荒野に掘られている2つの塹壕。1つは民兵の塹壕、もう片方は共和国軍志願兵部隊の塹壕だ。共和国軍の塹壕には、白い装甲服やヘルメットを土で汚し、ゴーグルやマスクを装着した志願兵達が互いの肩がぶつかりそうな程に横隊で並び、命令が下されるまで待機する。

「志願兵の諸君！私は指揮官のクリスチアン大佐だ。今対峙している相手は、あの分離主義の屑どもになびいた連中であり、テロリストと呼んでもよいだろう。そして、テロリストに容赦する必要はない！」

クリスチアン大佐は、共和国軍内において過激派の急先鋒に位置する軍人であり、ジュディシアルフォース時代には収監されている犯罪者に対して過剰な暴力を振るったことで問題になったらしい。そして、共和国軍に入ってから、分離主義者に対して強硬な姿勢をとっている。

「偵察によれば、敵の武装はブラスターライフルぐらいらしい。我々は、A-T-E部隊を全面に押し出して矛と盾とし、総崩れになった塹壕に歩兵部隊が突入して殲滅。その勢いのまま、その後方にある惑星シールドの発生装置を破壊する」

やがて、後方から貨物用のガンシップが到着し、A T—T Eが塹壕の目の前に下ろされた。

「ああ、もう一つ言っておくが、ガンシップやボマーによる支援は期待するな。全て別の戦線に持っていかれている」

その時は来た。

「突撃せよ！」

大佐の声と共にA T—T E部隊が地面をしつかりと踏みしめながら前進し、塹壕から飛び出した志願兵達はその後ろを進む。

A T—T Eは民兵のブラスターを装甲で弾きながらマスドライバー砲の砲撃を撃ち込んでいき、塹壕からは煙が上がった。

大佐を含め、誰もが簡単に敵の塹壕を制圧できると信じていた。しかし、敵には思わぬ伏兵があつたのだ。

「我が大隊は圧倒的ではないか・・・なっ!?!」

クリスチアン大佐は笑みを浮かべたが、すぐに驚きの表情に変わる。何故なら、彼が眺めていた先のA T—T Eが突然の爆発で吹き飛んだからだ。

「おい！何が起こった！」

大佐は近くの士官を捕まえて怒鳴る。

「てっ、敵の砲撃です！」

この時A T—T Eを襲った攻撃は、連合から提供されたJ—Iプロトン砲によるものであり、民兵によって隠されていたために共和国軍はその存在に気づいていなかった。そして、驚いている間にA T—T E部隊は壊滅してしまう。

「大佐、歩兵部隊を急ぎ退却させましょう」

「ダメだ！敵に背を向けるのは共和国に対する裏切りに等しい、そのまま行かせろ！」

クリスチアン大佐は筋金入りの愛国者であつた。それも、過激派と言えるレベルでだ。

「しっ、しかし・・・」

「ほう、君は売国奴なのかね？」

そんなことは上官に言われてしまつては士官も黙るしかない。そ

して、そのまま前進するように命令が下された。こうして、無防備な状態の俺達は砲撃やブラスターの雨の中を掻い潜って進むことになる。

それは地獄だった。

プロトン砲弾が着弾し、共に訓練に励んだ仲間達が吹き飛ばされて体をバラバラにされる。この攻撃で即死した者はまだ幸運な方だ、なぜなら、死ねなかつた者は死ぬよりも辛い苦痛を味わいながら、じわじわと死んでいくのだから。

右隣にいた奴が、ヘルメットごと額をブラスターで撃ち抜かれ、冗談を言い合って盛り上がっていた兵卒が首を撃たれて死ぬ。

そんな中、なぜか俺には全く攻撃が当たらない。まるで、俺に対する攻撃を味方が引き受けてくれたかのように。そのまま、俺は敵の塹壕までたどり着き、銃剣を先端に取り付けたDC-15を槍のように持って飛び込んだ。

飛び込んだ俺は、目の前にいた民兵の首を刺突。首から銃剣を引き抜いて横向きの斬激に繋げ、右から迫っていた民兵の喉笛を掻き切る。2人分の血が噴水のように吹き出し、その場は血の海になった。

その後も、俺は暴れた。DC-17で民兵を射殺し、その死体を盾にしてブラスターを防ぎ、サーマル・デトネーターで一網打尽にし、後ろにいた民兵をDC-15のストックで殴り倒す。倒れた所で頭を撃ち抜いて確実に殺す。

最終的に、俺が孤軍奮闘している間に生き残っていた味方も塹壕に突入し、塹壕を占拠した上で惑星シールドの発生装置も破壊。多大な犠牲を払いながらも勝利した。

しかし、問題はこの後だ。

俺達は死体の後片付けに追われることになったのだが、とある死体のポケットに家族写真が入っているのを見つけ、その死体を確認してみると、それは俺が最初に殺した奴であることに気付く。

俺はすでに両親、すなわち家族を失っている。しかし、俺はこの戦

場で誰かの家族を奪ってしまった。家族を失った自分の手で誰かが家族を失ったという事実は、俺の心に大きな傷を残すことになったのだ。

この戦いで俺は勲章を貰ったが、そんなものは慰めにもならない。暫くの間、俺は兵士として戦えなくなつた。

今でこそ普通に軍人として戦えているが、もしもあの時に今の上官であるヴィアーズ大佐やメイデイン將軍に出会わなければ、今のよう
に異世界の地を踏むこともなかっただろう。

余談ではあるが、クリスチアン大佐は部隊の再編成の際に降格され、どこかの戦場でその命を散らしたらしい。

第5話 炎龍を倒せ

1

「なあ、サトー。この逃避行はいつまで続くんだろうな？」

ジークは、運転席のサトーに話しかける。

「このスピードだと、もうちよつと長くかかるかもしれないですね」

「そうだな・・・」

そう言いながら、ジークは空を見上げる。そこには、ジリジリとこちらを照りつける大きな太陽があった。

「タトウイン並みに暑いな・・・ん？」

眩いたその時、彼は太陽の中に小さな黒い影があることに気付く。そして、その影は大きくなっていった。

「小型飛行クリーチャーだ！」

それは、異世界の国家が保有している航空戦力、翼竜の野生種だ。翼竜はこちらに向かってくるが、それは突然大きな口に飲み込まれた。

「何だと？」

そして、翼竜を食した存在は咆哮する。赤い鱗で体を包み、巨大な翼を持っているそいつは、以前エルフの村を焼き払った炎龍であった。

「炎龍だ！戦闘用意！」

ジークは咄嗟に命令を下す。そして、各々がブラスタを構えると、5台のスピダーは炎龍の方へと向かった。

炎龍に対して、避難民達は無力だ。炎龍はその脚で、その長い尾で馬車を破壊し、大きな翼の風圧で吹き飛ばす。逃げ遅れた者は馬車ごと潰され、運良く馬車から脱出できた者も、多くはそのまま丸飲みされるか、火炎放射でこんがりと焼かれてステーキと化している。

やがて、生き残りの人間の中でも動きの鈍い中年の農夫に狙いを定め、襲いかかろうとする。しかし、突然青い光の弾が炎龍に殺到し、炎龍は弾が飛んできた方向に注意を向けた。そこにいたのは高速で走

る鉄の箱であり、それに乗っている人間達が青い光の弾を撃っていた。

「隊長！ブラスター砲が全然効いてませんよ！」

重装トルーパーのルイス軍曹は、装甲ランドスピーダーに搭載しているZ-6回転式ブラスター砲を炎龍へと放つが、炎龍の鱗に弾かれて火花を散らす程度だ。ブラスター砲でこれなのだから、ブラスターライフルが効くはずがない。

「構わず撃て！奴の気を引けばいい！」

効果が無いことは百も承知、動きの遅い避難民から炎龍を引き離すことが目的なのだから。やがて、完全に炎龍はこちらへと狙いを定め、火炎を口内に集束させていく。

「火炎が来る！シールドを！」

各ランドスピーダーにはドーム状のシールドを張るシールド発生装置を乗せており、シールド同士を合わせて大きなドームを形成する。すかさず、ガンマ分隊の乗るスピーダーバイクもその中に待避した。

すぐに火炎が放射されるが、シールドを張っている第3偵察隊は火炎の中を素通りする。そして、黒煙の中から偵察隊は無傷な姿を現した。

火炎放射には耐えた。だが、シールドはエネルギーがいつか尽きてしまう。加えて、決定的なダメージを与えられていないし、炎龍にロケットランチャーを撃ち込む隙を作ることも出来ていない。大きく怯ませることができれば良いのだが……

「ono！ yuniryu!! ono！」

ジークが思慮しているところに突然割り込んできた高い声。後ろに振り返ると、寝ていたはずのエルフとかいう種族の金髪少女が一糸纏わぬ姿で立っており、自らの碧眼を指差しながら何度も「ono！」と発音していた。

“ono”

たしか、現地の言葉で……

・・・目だ！

「総員、奴の目を撃て！」

ブラスターの集中砲火が炎龍の目の辺りに浴びせられ、炎龍は大きく怯んで動きが止まった。すかさず、ジークは命令する。

「動きが止まったぞ！ルイス！ロケットランチャーだ！」

「ラジャー！」

先ほどまでブラスター砲を撃っていたルイスは、RPS―6ロケット・ランチャーを取り出して構える。そして、炎龍へと指向した。

「野郎ぶっ殺してやる！ヤロウオブクラツシヤー！」

ルイスは叫ぶと、ランチャーの引き金を引く。しかし、彼の乗るランドスピダーがたまたま岩の上を通過してしまい、少し揺れる。そのせいで、発射されたロケット弾は炎龍に当たらないコースを突き進んでいってしまった。

「まずい！外れるぞ！」

隊員の誰かが叫ぶ。

「あたしに任せな！」

しかし、ここでジェダイのリサが動く。右の掌をロケット弾に向けると、フォースの技であるテレキネシスを行使。ロケット弾の軌道を炎龍に当たるように戻した。そして、ロケット弾は炎龍の胸部へと一直線に吸い込まれていき、そのまま直撃して爆発する。爆音の直後、空気を震わせたのは悲鳴と思わしき炎龍の咆哮。それは、炎龍の断末魔となった。

「命中したぞ！」

やがて黒煙が晴れてきて、炎龍の姿があらわになった。その姿は変わり果てており、胸部には大きな穴が穿たれ、頭部は脱落しそうになっている。

「目標の死亡を確認！」

「やりましたねキャプテン！」

「そうだな、サトー。だが・・・」

ジークとサトーは周りを見渡す。辺りに転がっているのは、黒焦げであったり、壊れた馬車の板材に体を貫かれていた遺体。そして、酷い場合には手足しか残されていない遺体も存在していた。もちろん、偵察隊の奮戦によって生存者もそれなりにいるが、あまりにも犠牲が多すぎたのだ。

「総員、これより救護活動に当たる。また、アルヌス基地には応援を要請する」

2

炎龍が討伐された。その噂はコダ村の避難民達によって広められ、ついにはアルヌス偵察の任務に就いていた皇女、ピニヤやその護衛の騎士達の耳に入っていた。

「騎士ノーマ、どう思われますか？」

宮廷にて侍従武官の地位である女性準騎士、ハミルトンはとあることについて、先輩であるノーマに意見を求める。それは、今滞在している酒場の中で流れている、炎龍が討伐されたという噂についてだ。

ふと、ノーマは話が盛り上がっている席の方へと視線をやる。そこでは、コダ村の避難民だという女給が、目撃したという炎龍の討伐について客達に話しており、その対価にチップを受け取っていた。

「にわかには信じがたいが、ここに来るまでも多くの避難民が言っているのだから、嘘だとは思えない。まあ、もしかすると大型な亜龍や飛龍を見間違えたのかもしれないな」

その時、先ほどの女給が酒の入った瓶をピニヤ達騎士団のテーブルに置いて言う。

「いや、あれは間違いなく炎龍だったね」

「あの、もしよかつたら話を聞かせてもらえませんか？お金も払いますんで」

そう言うと、ハミルトンは銅貨を3枚取り出し、女給の手に乗せた。「ありがとう、若い騎士さん」

そして、女給は礼を言うと炎龍とそれを討伐したという白い兵士の

話を始めた。

炎龍が現れて村人達を次々と殺していったそのとき、私達には絶望しかなかった。

「ところが、そこに白い兵士達が駆けつけてきたのさ」

白い兵士達は浮遊する馬車みたいな乗り物で、炎龍の周囲を風の如く走り回りながら、手にした魔法の杖で攻撃を加えて炎龍の注意を引いてくれた。

「そのおかげで、私達は逃げる事ができた」

彼らの魔法はあまり効果はなかったけれど、彼らは攻撃を続けた。やがて、炎龍は火炎を彼らに浴びせかける。彼らに避ける素振りはなかったから、思わず目をふさいだ。

「けど、彼らは魔法の障壁みたいなのを張って火炎の中を素通りしたのさ」

そして、弱点だと思ったのか白い兵士達は炎龍の目を狙って攻撃を始めて、炎龍の動きを一時的に止めた。

「そこで、彼らの頭目が何かを叫ぶと、ついにアレが出たんだ」

「アレって何ですか？」

「デカイ魔法の杖さ。私達は勝手に鉄の逸物と呼んでいて、呪文も聞いたよ。たしか、ヤロ・オブ・クラツシャとか言ってた。そして、炎龍の胸に大きな穴を穿ったのさ」

「炎龍を倒した武器か、興味深いな」

これまでの話を聞いていたピニャは、小声で呟くと目の前にある骨付き肉にかじりついた。

3

避難民達の集団は、大きく3つに別れた。1つ目は先ほどの女給のように働きながら再び戻る時を待つ者、2つ目は親類縁者のところへ身を寄せる者、3つ目は炎龍によって家族を喪った孤児や怪我をした老人といった身寄りの無い者達であった。

ジークは、3つ目の人々を保護することをアルヌスの本部に提案し、それを了承した本部からは回収のガンシップ部隊が飛んできた。

また、ガンマ分隊が連れてきた神官や、偵察隊が保護したエルフ、コダ村のカトー老師と弟子のレレイもアルヌスへ同行することとなった。

「凄いぞレレイ！むしろは鉄の箱で空を飛んでおるぞ！もう思い残すことはない！」

レレイとその師匠であるカトー老師はリパブリックガンシップの一機に乗っていたのだが、カトー老師は横の出入口から転落しそうになるレベルで興奮していた。

「師匠、あまりはしやぎすぎると地面に落ちる。それに、白い兵士達も困ってる」

回りを見ると、ヘルメットの前面にT字の黒い模様？が入った兵士達が困惑していた。

「すまんなレレイ。興奮しすぎてしもうた」

カトーがようやく落ち着いたのを確認したクローンパイロットはガンシップの高度を上げはじめ、乗っていたクローントルーパーは両側の扉を閉じた。そして、ガンシップはアルヌスへと向かうのであった。

アルヌス基地　メイディン將軍の執務室

「偵察任務ご苦労だったな、ヴァイス大尉」

將軍に対してジークは敬礼で返す。

「しかし、難民とはいえ現地人の保護を提案してくるとは驚きだったよ。本来なら現地の民間人を招き入れるのはもう少し先の予定だったからな」

と、將軍の隣にいたヴァイアーズ大佐が言う。

「すいません大佐、孤児達を見捨てられなかったもので」

俺は家族をすでに失っている。だからこそ、同じ境遇の者を見捨てるわけにはいかなかった。

「こちらから本国に指示を仰いだところ、すぐさま許可を出してくれたくらいだ。だから、問題は無い」

大佐はそう言うのと、俺の右肩を軽く叩いた。

「大尉、まだ佐官以上の人間しか知らない話なのだが、共和国は保護した人々を共和国市民として登録することを画策している」

「市民として登録ですか・・・しかし、何故？」

「合法的にアルヌス周辺を勢力下に置くためらしい。そのためには、避難民達の集落を周辺に作る必要があるがな。そこで、彼らを保護してきた第3偵察隊には避難民の支援任務についてもらおう」

「書類や物資、人員の申請はすでに私が済ませた。君たちの武器庫の前に集結させてあるから、すぐに始めてくれ」

「ありがとうございます大佐。将軍、大佐、これより任務に取り掛かります」

そして、俺は執務室から退室した。

没になった話

旧第6話

1

その日の夜、アルヌス基地を目指して3機のリパブリックガンシップが避難民キャンプ付近を飛行していた。先頭の機体は炎龍の頭部を、後方の2機は共同で炎龍の胴体をワイヤーで吊り下げて運んでおり、その亡骸はガンシップのライトで照らされている。そして、その様子を見ている者がいた。それは第3偵察隊が保護したエルフの少女、その名もテユカであった。

「あれって、炎龍？」

テユカの脳裏には、白い鎧の兵士が放った爆発する大きな鏃？による攻撃で倒れている炎龍の姿が浮かぶ。

「本当に炎龍は死んだんだ・・・お父さん、早く帰ってきて・・・」
そして、彼女はあの時のことを思い出す。それはエルフの集落に炎龍が襲来したときのことだ。

燃える集落、精霊魔法で強化した矢を炎龍に放つエルフの戦士達、攻撃を物ともせずにもせよに暴れまわる炎龍、次々と死んでいく戦士や友人達、そして私を逃がそうとするお父さんの姿・・・

「君はここに隠れているんだ。いいねっ！」

あの時お父さんは、そんなことを言って私を井戸の中に投げ込んだ。直後に一瞬だけ見えたのは、お父さんの背後に巨大な炎龍の顎が広げられ、牙を剥こうとする光景だった。

「あ・・・！」

もう1つ思い出したことがあった。私が1度目を覚ましたとき、助けてくれた白い鎧の兵士達に、他の生存者について聞いた。しかし、返ってきたのは生き残りは私しかないという返答だけ。その返答を聞いたとたん、私は気絶していた。

「やっぱり死んじゃったのかな・・・」

信じたくないけど、状況から考えるとお父さんが死んでしまったの

はほぼ確定だった。お父さん、会いたいよ．．．

〈テユカ．．．．〉

「え？」

突然、お父さんの声が聞こえてきた。私は部屋の中を見渡すが、その姿を見ることはできなかった。

〈テユカ、私はすでに肉体を失い、精霊に生まれ変わった。だから、私を見ることはできない〉

「やっぱりお父さんは．．．」

お父さん本人がそう言っている以上、死んだという事実を認めるしかなかった。

「私、お父さんがいないと．．．」

〈大丈夫だ、テユカ。私は肉体を失ったが、精霊に生まれ変わった。私は常に君の傍にいる。テユカ、エルフ族の諺を忘れていないだろうね？〉

「精霊と共にあらんことを．．．」

〈そうだ、精霊は常にエルフと共にある。だから、私が君から離れることはないよ〉

その言葉を最後に、お父さんの声は沈黙してしまった。

「ありがとう、お父さん。私、頑張るから．．．」

常に私の傍にはお父さんがいる。それに、今は魔導士のレイや神官のロウリイ、優しい白い兵士達という仲間がいる。私はもう一人じゃない。

2

特地への共和国軍派遣からしばらく経った頃、銀河では共和国軍に對して追及する動きが見られるようになっていた。

当初、共和国軍の派遣に対して大半の共和国市民は賛同しており、批判的だったのはクローン大戦時代から存在する反戦団体くらいのものであった。しかし、しばらく経って市民達は考えた。

「侵略者に対して報復するのは当然だが、逆にこちら側が侵略者になっっているのではないか？」

そこを、反戦団体が煽動する形で追及が始まった。なお、この煽動

の裏には連合が大きく関わっているという説もある。

そして、煽動によつて大きく動き出したのは、共和国と連合の元老院双方に議席を持つている星々の議員連中、反戦派議員の団体といった勢力であった。その最中、とある連合寄りのメディアによつてホロネットに流されたニュースがあった。

『共和国軍の失態?!民間人被害者130名?!』

そのニュースが流れてから、毎日のようにコルサントの共和国軍事作戦センターや駐屯地をデモ隊が囲み、元老院では議員達による追及が行われた。だが、パルパティーン議長は焦ること無く答弁を行った。

「今回報道された民間人の被害者は、戦闘ではなく災害によるものとなっております」

「それはどのような災害ですか?その災害と共和国軍の関係は?」

「報告を受けている限りでは、大型のクリーチャーに襲われている現地の民間人を救助するために偵察隊が武器を使用したと聞いております」

「そのクリーチャーとの戦いに民間人が巻き込まれたのですか?」

「いえ、全ての被害は大型クリーチャーによるものです。一応、そのクリーチャーに関しては偵察隊によつて討伐されております」

「なるほど。では議長、以前質問した際にあなたは民間人の被害は無いとおっしゃった。何故、このような被害が出ているにも関わらず、発表しなかったのですか?」

「以前の質問は、異世界の国家との交戦に限る話だと認識しております。次からは同様な事態が起こった場合、その都度発表を行うつもりであります」

「では、もう一つ質問です。生存者の方々は現在どのような様子ですか?」

「生存者に関しては周辺の集落や都市に避難していると聞いております。ただ、身寄りの無い年寄りや怪我人、孤児については共和国軍が保護しております」

「なるほど、当事者が・・・では議長、その保護している当事者から

話を聞かない訳にはいけませんよ？生の声を聞かない限り、我々は報告を信用することができません」

こうして、参考人として現場の指揮官と現地人の代表が元老院に召集されることになった。

3

数日後 避難民キャンプ

第3偵察隊に、とある任務が命じられた。それは、イタリカという都市へ向かう避難民達を護衛することだった。彼らがイタリカに向かう理由は、丘に墜落している翼竜の鱗や爪を売るためである。

避難民達は、何とか自活したいと考えていた。そこで、丘に墜落している翼竜の死体に目を付けた。翼竜の鱗や爪は武具の材料になるだけでなく、それなりの値段で取引されている。共和国軍に相談したところ、自由に持つていいとの返答があったため、避難民達は戸惑いながらも鱗や爪を回収したのだ。

イタリカへと向かうのは、レレイとテユカ、ロウリイの3人である。全員、この世界の基準では大人に分類されているため問題はない。ちなみに、レレイは15歳、テユカは165歳とのことで、ロウリイに関しては、何故かレレイに首を全力で振って教えるのを拒否されたため、恐ろしい程上の年齢だと予測された。

なお、避難民の中には中年代が3人と高齢者が2人いるが、高齢者は体力の問題で、中年代は全員が怪我をしていることからイタリカに行かないことになっていた。

今回、護衛に当たって第3偵察隊はとあるビークルを支給されていた。それは、装甲兵員輸送機。最新のビークルであり、装甲ランドスपीダーよりも高い防御力を誇っており、武装として前面にはAT-TEのものと同じ対人レーザー砲が2門、後部の上面には2連装レーザー砲が1基装備されている。編成として、装甲兵員輸送機1、装甲ランドスピーダー1、汎用ランドスピーダー1となっていた。

さて、取引しようにも、大店では小娘が来たところで相手にしてくれないし、小規模の店では支払う金がないだろう。そこで、カトー老師の旧知の仲に商人がおり、イタリカに店を構えているとのことだった。

たため、イタリカに向かうことになったのだ。

やがて、子ども達によつて装甲兵員輸送機に鱗や爪の入った布の袋が積み込まれた。護衛対象の面々も乗せて出発しようとした時、基地の方から向かつてきたBARCSピーダーが近くで停車した。

「ようジーク、あたしもイタリカに同行するよ」

降りてきたのは、ジェダイのリサ・フェレルであった。同行すると言ってきたが、ジェダイが任務に同行するという話はジークも聞いていなかった。

「来るとは聞いてませんでしたか？」

「ああ、付いていくのはあたしの勝手だから。あまり気にしなくていいよ」

いや、気にするだろ・・・改めて思うが、本当にこの人ジェダイなのか？ジェダイオーダーも中々の爆弾を抱え込んでしまったようだ。まあ、ジェダイが部隊にいるに越したことはないし、何かの助けになるかもしれない。

こうして、第3偵察隊は再びジェダイと共に活動することになった。彼らは知らない、向かう先で戦いに巻き込まれてしまうことを。